

短報

小規模集落における景観改善による耕作放棄地の再生事例

伊藤 豊隆

Case Study in Regeneration of Abandoned Farmland by Improving the Landscape in Small Scale Hamlet

ITOU Toyotaka

要 旨

今日の日本の農山村では、過疎化、高齢化および少子化により地域コミュニティの維持と地域資源の保全が困難になり、地域の存続に関わる大きな課題となっている。耕作放棄と森林や里山の荒廃が進み、かつての農山村の景観が喪失されていく状況のなか、島根県中央部に位置する邑南町の東端にあり広島県境に接する川角（かいずみ）集落では、住民の殆どが 80 歳近い高齢者という厳しい条件下で「花桃」を植えて耕作放棄地を再生する取組みが行われている。2014 年 4 月のイベントには、4,000 人を超える多数の来訪者が花桃の鑑賞に訪れた。本研究では、高齢者が農山村の耕作放棄地を再生し、来訪者を魅了するような景観形成を成し得た要因について、次の 4 つの分析の視点、①ランドデザインの存在、②地域住民の参加と自己決定、③優れたリーダーの存在、④事業継続のための資金調達に着目して考察した。さらに、4 つの視点に加えて、地域に存在する絆も重要な効果をもたらすことを提示した。

キーワード：高齢者集落、農村景観、花桃、邑南町川角集落、耕作放棄地再生

I 研究の背景と目的

かつての我が国の農山村には、手入れが行き届いた里山と緑溢れる田畑が醸し出す壮大な景観が形成されていた。昨今は、燃料革命や生産者の高齢化などで労力不足となり、里山が利用されなくなるにつれ、耕作放棄地が拡大し、この景観が失われてきた。また、里山に連なるスギ、ヒノキなどの人工林は木材価格の低迷もあり、手入れされないまま放置されている。大野¹⁾は著書の冒頭で、「すみかを奪われた野鳥が姿を消し、荒廃し保水力を失った人工林は水枯れの沢を生むだけでなく、時として鉄砲水と呼び、これが川底を変え水中昆虫やエビ、カニ、川魚のすみかを奪う。また、線香林が部分的林地崩壊を招く」として限界集落の一端を描写している。

島根県邑南町川角（かいずみ）集落は高齢化率 78% を超え、8 世帯 13 人の殆どが 80 歳に近い高齢者集落である。少人数の集落ながら労力を結集して花桃（*Prunus*

Percia）を植え、2014 年 4 月現在 1.7ha を超える耕作放棄地を再生し、来訪者を魅了する景観として活かしている。また、筆者が行った現地確認調査では、林野を含め、手入れが行き届いており荒廃した森林の光景は見かけなかった。

本事例の担い手の年齢層は、通常では既に農業生産の第一線から退いているのが一般である。本研究では、著しく高齢化が進んだ川角集落の住民がこの取組みを可能にした条件について、ヒヤリング調査や観察結果に基づいて分析を試みた。

II 研究方法

1. 調査地概要

1) 対象地域

調査対象の川角集落は、島根県邑南町上口羽地区（旧羽須美村）に位置する。周辺地域の変遷をみると、1957

年2月に阿須那村と口羽村が合併して羽須美村が誕生し、2004年10月には平成の大合併により、羽須美村、石見町および瑞穂町が合併して邑南町が誕生した。合併後の面積は419.2km²の広大な地域となったが、2013年11月1日現在の人口は11,648人で、高齢化率は40.8%である。

中国山地の中山間地域に見られる代表的な盆地の多い地形であり、東側の羽須美地域をはじめ低地の割合も多く、そのほとんどは標高100~600mの地域となっている。また、瑞穂地域、石見地域の南側から西側にかけては1,000m級の急峻な地形が分布している。

西側は浜田市、北側は江津市、川本町、美郷町、南側は広島県安芸高田市、北広島町、東側は広島県三次市と接している。また、調査対象の旧羽須美村は、広島県三次市、安芸高田市に隣接しており、経済圏は地勢上広島県側となっている。

2) 川角集落

標高が350mほどにひっそりと佇み、人口は2013年1月1日現在が14人で、30年前の1983年においても40人であり、高齢化率は2013年1月1日現在が78%で、30年前の1983年においても54%であった(図1)。2014年1月1日現在の人口は、8世帯13人で、高齢化率の高い小規模集落である。

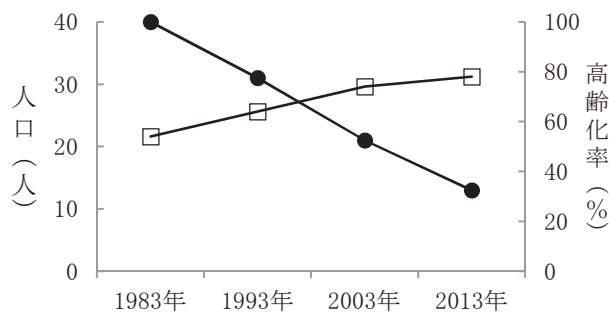


図1 川角集落の人口の推移

● : 人口, □ : 高齢化率

2. 調査方法

2013年9月~2015年1月に5回、集落のリーダーや関係者に対して花桃植栽、耕作放棄地再生などについてのヒヤリング調査を行った。主な内容は、景観づくりに取り組んできた経緯、地域運営の財源、花桃に関わった目的と経過、イベントの実施体制、取組みの成果などである。さらに、2014年4月20日にはイベント会場を訪問のう

え、イベントに協力しながら介入的観察を実施した。

これらの調査を通して得られた結果について、保母²⁾の提示した4つのチェックポイントを用いて分析した。

III 川角集落の景観形成に関する事例分析

1. 取組方針

今回取り上げる川角集落の事例は、過疎・高齢化がもたらす耕作放棄地の拡大に向き合い、リーダーが中心となり高齢者らが自らの体力の限界を認識し、少人数で少しずつ作業を積み重ねる取組みである。川角集落では、1998年から「菜の花と萩の里」と銘打ち、これらの植栽を始めた。10年近く継続したが、労力を多く要し、菜の花と萩の栽培では増加する耕作放棄地の再生ができないと考え、協議のうえ花桃の植栽に転換した。

2. 花桃植栽の現状と成果

2007年から毎年少しずつ花桃の苗を植栽し、これまで2haを上回る耕作放棄地に2,000本を植栽した(写真1)。リーダーは「花桃植栽を選択したのは、地域を桃源郷にする想いがあったことと、花桃植栽により形成される景観づくりは他の農作業に比べて労力が少ない利点があったため」と述べている。高齢者の地道な取組みは、やがて新聞報道などを通じて評価されるようになり、年間4,000人を越える人が訪れるようになってきた。2014年4月に開催されたイベントを観察すると、主催者の家族、近隣の住民、旅館、農産加工グループ、農協系の組織などの関係者が協力を駆けつけ、協働の体制が構築されているのが垣間見えた(写真2)。さらに、現場で観察すると主催者と協力者が共に、イベントを楽しみながら取り組んでいるのが活動中の言葉や表情に表れていた。

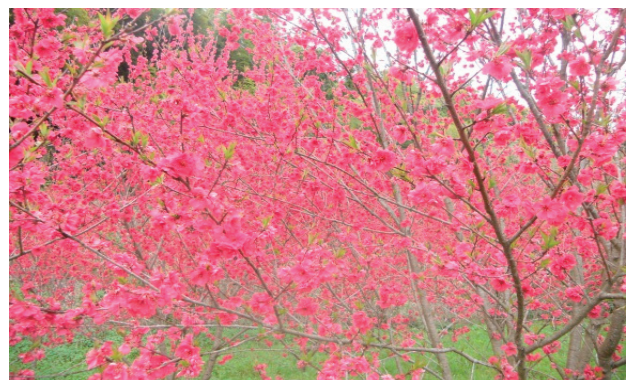


写真1 咲き誇る花桃(2014年4月、赤色系)



写真2 協働の体制で開催されたイベント
(テント横には白色系の花桃)

3. 分析指標

分析には、4つのチェックポイントを用いた。これらは、保母²⁾により次のとおり提起されている。

1) グランドデザインの存在

第一のチェックポイントは完成度の高いグランドデザインであり、しっかりとした戦略性を持ったグランドデザインは地域発展を促す要素である。

2) 地域住民の参加と自己決定

住民参加によりみんなで考え、提案し、理解し、共に行動するという地域の自己決定権が重要である。

3) 優れたリーダーの存在

大きな視点から物事を見極めることができるリーダーが不可欠である。

4) 事業継続のための資金調達

事業運営のための資金調達までも意識的に考慮した取り組みが必要である。

4. 分析結果

1) グランドデザインの存在

当初の景観づくりは、菜の花を植栽することから始めたが、花桃の植栽を転機に大きな変化をもたらした。ハナモモ（花桃）は、バラ目バラ科サクラ属の耐寒性落葉小高木であり、原産地は中国である。花を觀賞するために改良された桃の品種であり、主に庭木などとして利用される。花桃は湿気に弱いため地下水位の高い場所を避けるなど、植栽には注意が必要である。川角集落では花桃を植栽するにあたり、地域の人が可能な範囲で取り組む

よう合意形成を行った。花桃植栽は数年をかけ、地域の小学校と連携するなど少ない労力を補う方法を取り入れた。コツコツ積み上げて目標に向かう手法は、80歳近い高齢者ならではの現実的な取組みとして評価できる。

2) 地域住民の参加と自己決定

少人数で直ぐに集まり相談できるということが背景にあり、取組みを可能にしたのは参加者が無理をせず、地域住民同士が耕作放棄地の再利用を目指し、協働で夢を実現する合意が形成されたことがうかがえる。さらに、作業が終われば参加者が集まり、夢を語り談笑するという楽しみもコミュニティ活動では重要な要素であると考えられる。作業は楽しみながら行うという考えが浸透して、参加を強制せず自発性に任ずという考え方も、取組みが継続できた要因と考えられる。

3) 優れたリーダーの存在

川角集落のリーダーは、旧羽須美村時代には村会議員を歴任しており、先見性の視点や有利な資金を活用するなどマネジメント力に優れ、地域住民からの信頼も厚い。リーダーは物腰がやわらかで性格は穏やかであり、人に指図せず自ら率先して寡黙に作業に当たる姿勢は誰からも信頼されている所以である。

4) 事業継続のための資金調達

中山間地域直接払制度の資金や、有利な補助金制度などを巧みに活用して、準備した原資を基に花桃植栽を継続している。また、来訪者に苗を1本1,000円で販売し、記念植樹する仕組みもある。

今後は、放置林などでゼンマイやコシアブラなどを収穫して、換金する事業にも取組む計画である。これによって、耕作放棄地再生活動が収益を上げる仕組みに繋がることが期待する。2haの花桃畑を管理するには多大な労力を要するため、できる作業は住民自ら行い、できなければシルバー人材センターなどに委託する方針であり、そのための資金調達が当面の課題である。

5) 地域住民の絆

景観形成が成し得た要因を考察すると、地域住民は高齢で、労力は微力で、従事可能者5名と極めて弱小であるが、地域を美しい景観にする共通の目標と強い絆の存在を挙げることができる。県内外へ転出している人が郷土愛を保たれるように交流会を催し、居心地の良い場づくりに努め、同郷の仲間として大切に扱っている。これ

により定年後にUターンする者が出現しており、営々と構築してきた仲間意識がもたらしたのものとして重要である。

また、この地域は1983年当時から高齢化率が54.2%もあり、30年以上前から既に限界集落であったという事実は重要である。川角集落の住民は、様々な困難に対して、結束して親密な人間関係を築き、対処する営みを継続的に取組み、過疎に立ち向かう行動規範を形成してきている。このように強い共同体意識を有していることは、保母が提起する4つのチェックポイントを満たしていることに加え、川角集落の優位性であると分析した。

IV 景観に関する考察

これまで地域資源の概念は、経済的価値の創造に視点が置かれ、経済効果の少ない景観の概念はあまり重要視されてこなかったのではないかと。経済効果が見込める事象が注目され、農林産物の一次産品に付加価値を付ける産業や、直売所の運営など直接的に経済波及効果の高いものが資源として想定されてきた。すなわち、農山村が抱える課題解決において、経済活動に繋がれば地域の再生であると見られがちになる点を指摘しておきたい。

藤沢ら³⁾は、「景観とは自然界における人類の行動の軌跡を美的に見たさま」としており、あるがままの自然だけではなく、美的意識を加えた概念として提示しており、本稿では藤沢の概念を採用した。

他の概念として江崎⁴⁾は、「農村景観とは、その地域の自然と農業と農民や農村に居住するものの生活とそのかわりの総体、すなわち、好むと好まざるとにかかわらないこれらの関係の総体として、表現として認識されなければならない」として農村空間全体が醸し出すものを指している。

木村⁵⁾は、「村落史の研究は景観を重んずることから始まる。ここでいう景観とは耕地・集落・水路・林野等々。村落を構成する具体的要素である」としている。これは江崎⁴⁾と同様に、農村景観を構成要素の総体として捉える概念である。

上述した藤沢ら³⁾、江崎⁴⁾、木村⁵⁾とは異なり、概して他の先行研究では、景観の概念を文化的遺産や民俗学的な視点、建築学などから捉えられることが多く、また民間業者が多大な投資を行う観光の業態によって形成さ

れる景観にも焦点が当てられてきた。これに対して、川角集落でみられるように地域住民が手づくりで取組み、自然に近い資源に関する研究が比較的少ないため、本事例を考察したいと考えた。

筆者が農村景観の概念をあらためて塾考する理由は、かつて農山村に存在していた美しい癒しの空間が、過疎化、高齢化に伴って変貌する中、高齢者のみの川角集落の住民は増加する耕作放棄地を再利用して美しい景観を蘇らせ、地域づくりに波及効果を生み出したのを目の当たりにしたためである。

V まとめ

本稿では、80歳近い高齢者のみが暮らす少人数の集落において花桃を植栽して、耕作放棄地を再生する事例について保母の提示する4つの視点から考察し成立要因を分析した。

川角集落の実践を考察した結果は、先ず第一には、毎年少しずつ耕作放棄地を蘇らせて、最終的に「桃源郷を創る」という目標に向かう設定が功を奏した。第二には、作業は楽しみながら取り組むという考え方が活動の中に浸透しており、参加しなくても強制をせず、自発性に任ずるという考え方が、この取組みを継続できた要因と考えられる。第三には、リーダーは先見性の視点や有利な資金を活用するなどのマネジメント力に優れ、地域住民からの信頼が厚かったことが取組みを推進させた。第四には、中山間地域直接払制度の資金や補助金制度などを活用して、準備した原資の範囲内で花桃の植栽を継続し、苗を1本1,000円で販売して記念植樹していただくアイデアは有効であった。新たな投資を求めることなく自前の資金で実施したということも取組みが継続できた要因である。

第五には、保母の提示した4つの視点に加えて観察されたことであるが、地域を美しい景観にするという共通の強い想いが働いていたことを挙げるができる。この共同体意識と強く結びついた絆が無ければ、僅か5名の少人数での取組みは成し得なかったのではないかと考える。

何故に川角集落の取組みに対して多くの人が引き付けられるのかを考えてみると、それは80歳近い高齢になっても体が動く限り、社会的な存在として生きて証を夢の

実現に向けられているためである。

VI おわりに

本研究において川角集落に着目した理由の一つは、今日の人口減少時代にあっては、我が国では消滅する集落が増加する状況で、耕作放棄地を放置するのではなく、80歳近い高齢者が限られた選択肢の中で、景観作物を植栽して耕作放棄地を再生させていることである。高齢になれば労力的にも衰え、少人数ではできる作業量は限定的になるが、この事例を通じて地域を守ろうとする意味は何かを提示したかった。これにより、全国の多くの限界集落が何をなすべきかを提示できる事例として、僅かだが希望と共感を与えると考えた。

筆者は、2014年4月20、21日の両日にわたって高知大学、高知県立大学、松山大学の学生4名を引率して、



写真3 イベントで猪汁を配布する学生

川角集落の取組み事例を調査した。学生たちは猪汁の配布、花桃の記念植樹、交通整理などにも協力した(写真3)。川角集落のような高齢者による活動は、5年、10年と継続するには労力的に限界があると考えられる。対処法としては、外部人材が関与して地域づくりを支援することや、UIターン者などが地域活動を持続的に進めるように、サポート体制を整える必要がある。上野ら⁶⁾は地域維持の現状において、「そこで生活する人口を保持する必要があるが、国内の農産物の市場競争性からみて、条件不利地域の集落内では農林業活動でその生計費を賄えない場合が多い」としているが、経済性を追求するだけに留まらない視点を持ち、本事例を参考にした取組みが他の高齢化地域でも実施されることを期待する。

引用文献

- 1) 大野晃 (2008) 限界集落と地域再生. 高知新聞社:17.
- 2) 保母武彦 (1996) 内発的発展論と日本の農村. 岩波書店: 155-162.
- 3) 藤沢和・長谷川明彦編著 (1996) 過疎地域の景観と集団. 日本経済評論社: 59.
- 4) 江崎陽一郎 (1988) 農村景観について. 農村計画研究会編 6. 農村計画研究部会誌: 6.
- 5) 木村礎 (1988) 村落景観の史的研究. 八木書店: 12-13.
- 6) 上野眞也・山中進編著 (2005) 山間地域の崩壊と存続. 九州大学出版会: 79.